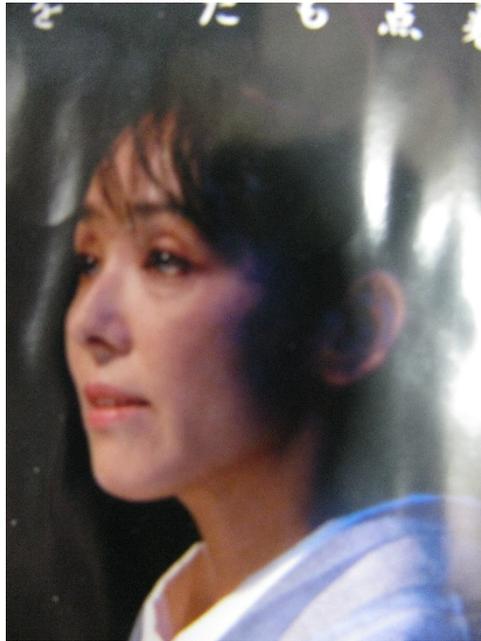


## ことば『源氏物語』全五十四帖隔月連続語り第十九回

<< 作成日時 : 2012/08/14 16:41 >>

2012年8月12日



### 永遠の容姿

本文朗読が始まる前の粗筋説明のとき、語り部は「この会を始めても4年になるのですね」と感慨を述べられた。「矢のごとき光陰」に改めて慨嘆されたのであるが、初回から参加している我々にとっても同じことが言えそうである。

4年といえば、しばらく会っていない知人と出くわしたときに加齢の兆候をはっきりと感じさせる期間として十分である。

その間我々はもとより、語り部自体、風邪を引いて声が本調子でなかったり、足を骨折したりするアクシデントに見舞われている。幸いに彼女の容色に衰えは見られず、ますます美しく艶麗なさまは、私たち観客に安堵と気持ちの高ぶりを与えてくれるのである。

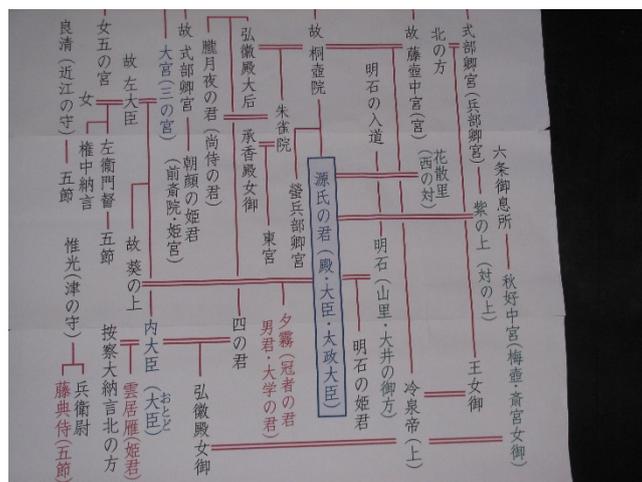
もともと、4年間会っていない人がその場で彼女を見たとき、容貌の何らかの変化を見て取ったかもしれない。二か月に一度会える私たちにとっては、彼女は初めに会ったときそのままなのである。おそらくあと5年は続く予定のこの会に通い続ける限り、彼女の容姿はそのままであり続ける。

## 夕霧の恋

さて今回は第二十一帖「乙女」の巻きである。他の帖に比べれば長文ということになるので、語る方も大変だが、聞く方も忍耐と努力を要することになる(開始を告げる主催者側の女性が「覚悟しておいてください」と述べた)。

私は例のごとく、ふっと夢心地になる瞬間が多々あり、私なりの対処の仕方ですべて聞いているので、退屈に感じたり、別のことを考えたりすることは全くない。夢心地になる瞬間は、目を閉じた私の耳朶の奥で、彼女の澄み渡った声が浮雲のようにふんわりと反響しているのである。至福の時といえよう。

この帖では複雑な人間関係が入り乱れるので、人間関係を分かりやすく示した関係図が掲示され、これまでの経緯を含めて頭に叩き込んでおくと、もつれた糸がほぐれるように内容が分かりやすくなる。



この帖の主人公は、源氏と正妻葵の上との間に生まれた夕霧(長男)である。

葵の上は夕霧を生むと同時に亡くなってしまった。夕霧は葵の上の母君である大宮に預けられて育てられる。大宮にはもう一人夕霧の従姉妹(葵の上の兄にあたる内大臣の娘)雲居の雁という名の娘が預けられていて、夕霧とはほぼ同年輩である。

十四歳になったばかりの愛くるしい少女である。自然二人は仲良しになり、恋を意識するまでになる。

### 内大臣の野望

しかし、大宮に仕える女房たちの噂話から、この幼い二人がどうも恋仲であるらしいと知った父親の内大臣(源氏のライバルと目されるかつての頭の中將)は、ヤバイことになりそうだと感じ、娘を老母大宮から取戻し自邸に引き取ってしまう。

大宮は、自分の生き甲斐でもあった孫娘と引き裂かれ、息子の無慈悲さを怒り悲嘆にくれるが、もっと悲嘆にくれるのは恋する夕霧である。

夕霧は頭も容姿も抜群にいい貴公子であるが、父光源氏の思惑によって官位も六位に留められ、大学の寮に預けられて勉学を強要される。

太政大臣となって官位の頂点を極める源氏にあってみれば、長子の官位を一、二階引き上げることなど何の造作もないことであるが、教育上の観点から官位を六位に留めたままなのである。

夕霧はそれが不満でならないがどうにもならない。一方内大臣にしてみれば、時の最高権力者の長子と結婚させることに何の不満もないはずであるが、彼の野心はもう一つ上を狙っている。つまり、東宮(皇太子)の女御とし、いずれは天皇の外

戚となるという夢を追っている。

東宮は次の天皇が約束されている。ライバルへの対抗心もあってのことであろうが、源氏がいかに人臣を極めているからといっても、我が国の最高権力者である天皇の比ではない。若い二人が恋仲となったことをヤバいと思った裏には明確な訳があったのである。

### 源氏の若君の行方

ここでも身分の差が恋に影を落としている。若いころの源氏であれば、仲を引き裂かれようがどうされようが、強引に相手の寝所に出向いて関係を結んでしまう澆刺とした行動力があつたが、夕霧にはそれがない。ないというより、低い官位のため、他人の屋敷に踏み込むような大胆な行為が出来ないのである。

夕霧の登場により、読者は若き源氏の再現を期待するところであるが、物語の巧みな構成によって若き源氏の再現を阻まれている。作者紫式部の唸らせるほど巧みな構成力である。

もしかして、源氏の女遍歴を引退させないでまだまだ活躍させるため、息子夕霧の活躍を押さえているのかもしれない。

夕霧はその鬱憤を晴らそうとでもするかのように、源氏の古くからの従者である惟光(これみつ)の娘を見初め、ラブレターを送ったりしている。語り部も解説で述べていたように、やはり好色な親の血を引いていることは疑いえない。

しかし、大学の寮に熱心に通っただけあって、試験の結果夕霧は進士となり(文章生)、念願の五位に昇進する。夕霧の足場は固まりつつある。



## 源氏一大ハーレムを造営

さて、源氏はといえば、いろいろな場所に散らばっている愛人たちを一か所にまとめて住まわせることを考え、かつて六条の御息所の邸宅があった辺りに四町（一町は60間109メートル）の広さの場所を確保し、一年余りで新宅を造営した。

そこを四つの町に分ち、それぞれの邸に春夏秋冬の景色を配し、西南の町は、もともと六条の御息所の邸があった場所なので、その娘前斎宮の梅坪の中宮、東南は源氏の君と紫の上、東北は花散里、西北は明石の君の住まいというふうに割り振った。

いつでも望むときに各邸の四季折々の景色を楽しむように配置した。各邸は回廊で結ばれ、お互いが行き来できるようになっていた。

すべての男が望む理想郷を実現させたのである。これ以上何を望もうか、といってもよい究極の形であるが、欲望には終わりというものがない。源氏はまだ三十代半ばの年である。新たな恋の冒険が源氏を待ち受けている。



2012年8月17日

### 戦場の軍法会議

一昨日の敗戦記念日に合わせて、NHKで「戦場の軍法会議」という番組が放映された。

戦争末期になると、現地に転戦する脱走兵が増え、部隊の営舎内で軍法会議が開かれ、多くの兵隊が銃殺ないし斬首された。

脱走ばかりではなく、兵隊同士の喧嘩、上官殺し等という罪状も記録されている。その数は二万人に及ぶというから驚きだ。

軍法会議の記録は敗戦日の8月15日に陸軍省ですべて焼却され、消却の煙は天を焦がしたとのことである。しかし、現地(フィリピンルソン島)で法務中佐を務めていた人物が記録を保管しており、そのすべてを若い知人に託した。中佐が亡くなったので記録が公開されることになった。公式文書、日記、テープ、積み上げられたそれらは膨大な量である。

たとえ本部で記録が抹殺されても、どこかにその片鱗は残る。これが歴史の真実である。

その記録の中で、「処刑に値しない」と日記に書かれながら、実際には処刑された兵士もいた。処刑の場面を目撃した生き残りの元衛生兵は、「まったくむちゃくちゃですよ。集めてきて横に並ばせ問答無用で撃ち殺してしまうんですもの」と証言している。

自分の意に沿わない死刑判決であっても書類に「諾」のサインをした元法務中佐

は、「止むを得なかった」と弁解した。

### 内なる「武士道」

これが戦争であるとしてしまうことは容易い。私が注目するのは、捕虜の虐殺ではなく同僚の、同じ部隊の日本国の兵士の死刑であるということである。

ただでさえ人員が減って敗戦色濃厚の現地部隊の兵士を、次々と軍法会議で処刑する部隊上層部の意識に在ったものこそが問題なのである。

つまり、彼らの意識を占めていたのは、どのような状況にあれ、皇軍として「生きて捕虜となることなかれ」「裏切りは死に値する」といった軍部の絶対命令があったからであり、誤解を怖れることなく言えば、「武士道精神」が生々しく生きていたからである。

脱走というよりも、食べ物を求めて部隊を離れたため、脱走とみなされ処刑された兵士もいる。

敵国である連合軍にも、むろん戦場で軍法会議に掛けられる兵士がいたであろうが、重営倉入りはともかく、死刑となった兵員がどれくらいいたのであろうか、知りたいところである。いたとしても数十人規模であろう。

日本軍兵士の2万人というのは常軌を逸しているといわざるをえない。

敗戦に際して、腹を切ったりピストル自殺をした軍人は数多くいた。彼らは、自らの内なる「武士道」を体現したのである。

### 現代に蘇る「武士道」

だが敗戦とともに「武士道」は滅びた。欧米流の民主主義国家となった日本に、「武士道」は必要がないものであり、むしろ害悪であるとしてその言葉に触れること

もなくなった。

「武士道」を涵養するとして、剣道の稽古さえも連合国軍によって禁止されてしまったのである。

とはいえ、そんなことで国民精神が総崩れになることがないのが日本人の大和魂である。目に立たないところで真剣を振り回し、苦勞して散逸した日本刀を集め、我が国の伝統文化を必死で守ろうとした人たちがいた。

彼らは新しい形の「武士道」を復活させようとしたと思えてならない。

敗戦とともに滅びた旧来の「武士道」は、国(藩)や主君に対する忠誠が第一義的なものであった。そのほかには、辱めに対しては死をもって報いる、敵に背を見せない、人を殺めた時は(たとえ止むをえない場合でも)自死をもって償う、義を重んじ、救いを求める人に対しては状況の如何にかかわらず助太刀する、といったことが挙げられよう。

これらのことは(主君への忠誠ということを除いては)、最早主君が存在しない日本国において「武士道」の美德と断言してもよい。

さらにこうしたことに加えて、仁義礼智信孝忠といった儒教思想からくる徳目も日本人が古くから涵養してきた生活規範である。

むろん、武士道のうちに加えられるべき項目であるが、例えば「忠」という概念は、主君に対する忠であって、現代では通用しないのではないか、という疑問が当然のごとく起こる。

しかし、組織や会社に対する「忠」というのは現代でも通用しており、この観念こそ高度成長期の日本を支えてきた原動力でもあったと思うのである。

## 儒教思想がキーとなる

いまや、親孝行というのは死語となりつつある。儒教思想が最も尊いものとした親孝行こそ日本人の道德観念を高め、日本人独特の礼節感をもたらし、日本国繁栄の礎となった生活観念なのである。

戦後の民主主義思想の普及によって欧米の価値観がすべてに優先し、日本人独特の倫理思想が崩壊の危機に直面している。

しかし、すべての日本人が伝統的価値観から無縁となったわけではない。「武士道」精神は根本的にはどっしりと根付いていると私は考えている。ただし、ごく一部においてではあるが。

さらに踏み込んで述べるなら、かつての戦争時におけるように、誤った武士道を、正し日本人独特の倫理思想に基づいた武士道を復活させることこそ、現代の我々の責務ではないだろうか？

グローバル化によってすべてが均一になることはむしろ害となる。民族の個性を最大限に生かしてこそ世界に誇れる国家となることができるのである。

現在世界を支配する欧米が民主主義思想を絶対的価値とみなし、中東・アフリカの諸国へその価値観を強要しようとするのは、大きな誤りであるといえるであろう。彼らは欧米の主流を占めるキリスト教ではなくイスラム教を国教としている。価値観を押し付けるのは、宗教を変えろといっているようなものだ。

### 日本人のしたたかな宗教心

アジアの絶対主義国家であった日本が一夜にしてコロリと民主主義国家となることができたのは、日本人独特の宗教感のたまものである。

つまり、大半の日本人には絶対的宗教というものがない。仏教も神道も、山川草木ことごとく仏(神)なわけであり、絶対的唯一神というものがない。したがって、キ

リスト教であろうがイスラム教であろうが、支配者が押し付けてきたものに対して何の抵抗もない。

生活のスタイルとして押し付けられた規範を守っていればいいだけであって、その考えの根には祖先から伝えられてきた魂が宿り続けているのである。

民主主義というのは幾分便利になった生活の道具にすぎない。家では、先祖をまつる仏壇があり、別の場所には、天照大神を祀る神棚がある。はなはだしい場合には、新興宗教の祭壇がまた別の場所に設けられている。

これらの事例をもって、日本人には宗教心がないという人がいたら、それは大間違いというものだ。道端の石仏にその都度立ち止まって手を合わせ、神社の鳥居の前を過ぎるときに奥にある本殿に向かって深々と頭を下げて通り過ぎるお年寄りたちには、本来の意味での深い宗教心が宿っている。それが日本人の心情であり魂であるのだ。

したがって、外敵に向かう時には祈りの心が完全に一つになり外れるということがない。魂が発動されるのである。

ひとたび魂が発動されると死をも厭わない心情が形成される。それが軍部によって主導された天皇崇拝に導かれると、全員玉砕を至高とする唯一心となるのである。

### **能天気な歴代政府**

さらにまた、日本人の美徳に礼儀正しさと親切心が上げられる。相手が非礼な態度で接してきてもそれを敢えて咎めることはしないことが多い。

それを侮辱として受け止めれば決然と立ち向かうが、自分の名誉を損なわない程度の非礼は、あいまいに笑ってやり過ごすようなところがある。その態度は親切

心の裏返しといえる。

しかしながら、現在の日本政府は、それとなくやり過ぎて無難であろうとする非礼と、決然と向かい合わなければならない侮辱を取り違えているように見える。

我が国固有の領土であることが明白な竹島が韓国に占領されようとしている。

「そこは我が国の領土です」と宣言したままのほほんとして時を過ごしているうちに、韓国は監視塔を建設し、国旗を立て、兵士を常駐させて、占領の既成事実を作り上げようとしている。

先日も、韓国の李大統領がわざわざらしく竹島を訪問し、石に彫込まれた韓国国旗や「韓国領」と刻み込まれた岩肌をいとおしげにさする風景が放映された。

また、尖閣諸島では数人の中国人が国旗を掲げて上陸し、「ここは中国領土だ！」と声高く領有を宣言する始末である。

## 付け上がる相手国

それら一連の事件に対しては「厳正に対処する」の文言だけで、素早い行動はみられない。

相手国家と過剰な摩擦を起こしたくないというのがその理由らしいが、そうした態度こそが、韓国、中国、ロシア、につけいられる原因となっている。

少々の過激な行動を起こしても日本は何もできないことが分かっているからどんどん押し込んでやれ、というのが上の三つの国の付け上がった態度なのである。

忘れもしないのは、半年ほど前中国の漁船が尖閣諸島に近づき、それを阻止しようとした我が国の巡視船に体当たりして破損させたことに対して、漁船の船長を逮捕したものの翌日には釈放するという屈辱的措置を日本国は取った。

その船長は祖国に帰還して英雄として迎え入れられた。ご苦労なことに日本政府がわざわざ英雄を仕立て上げたようなものである。

今回でも全く同じことが行われようとしている。魚釣島に近付こうとした相手の船を阻止できず、乗組員の上陸を許したばかりか、衝突やレンガの破片の投擲で我が国巡視船が破損を蒙ったにも拘らず、あえて公務執行妨害、器物破損はなかったものとして刑事事件にはせず、翌日の強制送還処置に留めた。

刑事事件にすることによって相手国との過度の摩擦を避けたいというのがその理由らしいが、その腰砕けの措置によって、相手国はますます増徴しさらに過激な行動に打って出るであろう。その時にアメリカに頼ったり深く懊悩したりしても手遅れなのである。

### すぐ負けるポーカーゲーム

毅然とした措置が取れないのは、国交断絶などによって貿易で多大な損失を蒙り、景気が低迷している我が国に決定的なダメージを与える恐れがある、といった危惧が先行しているためである。

確かに、中国、韓国との貿易が(一時的にせよ)途絶えれば、我が国に及ぼす経済的ダメージは相当なものがあるであろう。

しかし翻ってみれば、相手だって相当なダメージを蒙るのは必定である。

日本はそれを怖がって手を挙げてしまっているのであるが、相手は、ワンペアの手の内を隠して大金を賭けて相手を威嚇し勝負を挑もうとする度胸のあるポーカーゲーム師とよく似ている。

相手の傲然とした揺るぎない態度にビビって、スリーカードの手を持ちながら、

早々に降りてしまう素人参加者が日本である。

こけおどしでも、相手を下させてしまう勝負師が一枚も二枚も上であることは明らかである。

日本は自らの民族の魂である武士道精神を失ってしまっていると言わざるを得ない。

ことに臨んで毅然とした態度を取り、「死闘も覚悟の上」とすごんで見せる度胸に欠けているのである。

日本人が民族の魂として心の奥底に沈ませている「武士道」が消えかけているように思えるのは私だけであろうか？

世界で類を見ない古武道、剣道、柔道、空手をお家芸とし、「武士道」の国として世界中から尊敬の目で見られている我が国の誇りを政治家たちは失っているのではないか？

毅然とした態度が結果としてもたらす国難に耐える民族の魂は揺るぎがない、と私は信じている。

最後に単純な疑問を一つ述べておきたい。

逮捕された不法上陸者の一部は、昨日民間航空機で強制送還されたが、その運賃はどうなっているのだろうか？まさか国が支払っているのではあるまい。

旅客運賃も取らないで「さあ、お帰りください」と丁重に飛行機で帰国してもらい、揚句到着後英雄として歓迎されるという愚を犯しているとしたら、こんな茶番が許されてよいはずはない。



## 今申楽と隴太夫

杉並区高円寺の舞台で、「東日本復興勸進今申楽」と副題された芝居を観た。

作・演出は隴太夫。数年前伊豆の修禅寺 1200 年祭を記念してとり行われた、北条政子と子息である時の将軍源頼家を巡る舞台に接して、初めて彼の存在を知った。

修禅寺という高名なお寺の記念すべき祭事として、本殿で舞台を披露する榮譽に浴した「隴座」という申楽集団に、大いに興味を抱いたのである。

その後偶然といえる出会いがあり、隴座主催者である隴太夫は私の剣術の弟子となったが、直後に杉並区議会の議員に立候補して当選、剣術どころではない多忙な議員生活を送ることとなってしまった。

そうした状況の中で演劇を続けるというのは神業にも等しい行為であるが、彼は今回その神業をこなしたわけである。

私が予約したのは、高円寺氷川神社の野外特設舞台公演であったが、あいにく開演間際に雨が降り始め、急遽ステージは近くの「座・高円寺2」という場所に変更となった。高円寺氷川神社には気象を司る神様を祀る珍しい社があるとのことである。別名気象神社といわれる所以である。その日は何故か気象の神様の逆鱗に触れて、雨となって神社境内の使用を差し止められた形となった。

## 一風変わった展示室係員

差し替えとなった会場は、百人ほどで満席となる小規模の小屋であるが、数百人規模の大舞台が階上にある区所有の立派な施設なのである。

申楽は猿楽とも言って室町時代から普及し始めた庶民芸能であるが、能楽に吸

収されることによって一般的な芸能となったのである。

今回の演目のタイトルは『風』となっていて、神風特別攻撃隊の一員として出撃する一人の若き特攻隊員にまつわる話である。

冒頭、戦闘機の頭部に擬せられた装置が設置され、その横に戦争で散った軍人たちの遺品が展示される靖国神社の展示室が示される。杖を突いた一人の老人が、展示品の鑑賞に訪れるところから物語が始まる。

何故か陸軍軍刀を腰に下げた展示室の係員がもう閉館時間だと告げるが、老人はそれを無視して鑑賞を続け、感慨にふける。

係員は、その動作や受け答えがまるで旧軍人のようであり、そういう場所なので一風変わった人間を館では雇ったのだろう、と観客に思わせる設定である。

## 失神したままの背面飛行

今申楽の名の通り、能、歌舞伎で名高い『道成寺』の物語が話に絡んでいて幾分分かりにくい構成になっている。

しかし基本的には、ただ一機出撃して、沖縄沖の洋上で敵艦船との戦闘で負傷し、生死の境をさまよう夢幻状態の中で、過去を思い出したり先輩軍人の亡霊と対面し会話を交わす内容である。

出撃特攻隊員は軍人になる前、申楽の一座にいて修行に励んだ過去を持っている。それらの思い出が『道成寺』と重なり、能のシテとなりきって特攻隊員が朗々とした謡曲を謡い、裏切った男に対する恨みの権化と化した娘の激しい舞いが舞われる。申楽の舞台面目躍如といったところである。

特別出演の山口果林が雪女役で出演するが、老女と若い娘の声音を巧みに使

い分けて演ずる様子は見応えがある。

特攻隊員は自ら操縦する零戦の翼の上に現れた大尉の亡霊と会話を交わす。大尉は特攻隊の一員として敵艦に突っ込んで散華した上官である。その亡霊大尉の必死の説得で敵艦突入を断念し、小さな島に不時着して一命を取り留める。

操縦士は敵艦船の対空砲火で重傷を負い、ほとんど失神した状態で飛行を続ける。知らぬ間に背面で洋上すれすれに飛行していてふと気づき、機を元の位置に建て直し、無事不時着して一命を拾うのである。

このシーンは太平洋戦争で零戦乗りの撃墜王として名高い坂井三郎の手記『空戦記録』その他に描かれた場面を想起させる。

彼は、日本軍の基地があったラバウル島から出撃し、そこから 1200 キロもあるガダルカナル島の敵基地の爆撃の作戦に加わった際、敵機の機銃掃射で重傷を負い、任務を終えてトラック島の基地へ帰還する途中意識を失いふと気が付いたら洋上すれすれのところを背面飛行していたというのである。

それでも、出血多量で失神しそうになるのをどうにか堪え、ほとんど燃料タンクが空になった状態で 1200 キロを飛行し、命からがらラバウルへの奇跡の帰還を果たすのである。

実に感動的な場面であるが、この特攻隊員は坂井の体験をなぞっている。決死の飛行とはこういうことをいうのであろう。

### 菊池大尉辞世の句

英霊となった大尉は母国に置いてきた妻の身を案じ、ついに会うことが適わなかった我が子に思いを巡らせる。ふと気付くと大尉の姿は消え失せている。そのとき彼はふと歌の上句を思い付く。あたかもあらかじめ刷り込まれた記憶であるかのよ

うに。

「かえらじと思う心のひとすじに」

舞台は再び冒頭のシーンに帰る。そのとき観客は、杖を突いて遺品展示室に現れた老人が、沖縄の島に不時着して一命を取り留めたかつての特攻隊員であったことを知ることになる。そうして軍刀を吊り下げた係員が亡霊となって彼の前に現れた大尉の転生した姿であることを。

係員は鞘に入ったままの軍刀を老人にかざして見せる。刀の鞘には、

「玉と碎けて御国まもらん」

と書かれている。

老人は、自分が特攻機の中で思い付いた上句と上手く繋がっているように思うが、その係員が亡霊となって自分の前に現れ、結果的に命を助けてくれたあの大尉殿であることに思い及ばない。

「かえらじと思う心のひとすじに玉と碎けて御国まもらん」

この歌が、玉砕した実在の特攻隊員菊池誠陸軍大尉の辞世の歌であることを、作者朧太夫はチラシの挨拶文に書いている。

私たちは二度と戦争の悲劇を繰り返す積りはないが、戦争を辞さない勢いで喧嘩を吹っかけてくる国々に囲まれて生活している。人間というのは愚かで、欲深い生きものである。常にその反省に立って生きることが、せめての罪滅ぼしになれば幸いである。

## 吉田兼好『徒然草』を読む

<< 作成日時 : 2012/09/02 23:08 >>

2012年9月9日

### 苦行に等しい読書体験

『方丈記』の項でも述べたことであるが、道元禅師の『正法眼蔵隋聞記』を読むために図書館で借りた、小学館発行の『日本古典文学全集 巻44』には、『正法眼蔵一』はもとより、『方丈記』を始め今回の『徒然草』『歎異抄』が収録されているため、この際良い機会だと思い、収録されている作品全部を読むことにした。

『方丈記』が意外と短文であったので、『徒然草』を軽く見ていたが、『徒然草』は二四三段にもわたる長編随想録であり、なおかつ原文で読むわけであるから、読了するのに睡魔と闘う忍耐と多大の努力を要した次第である。

A5版の大型本全集のページの真中に本文が掲げられ、上段は永積安明氏による校注、下段は訳文という体裁で、校注、訳文ともほとんど改行のない細かい字体でびっしりと書き連ねてある。したがって、同じ大きさの大型本のほぼ四倍の時間がかかる勘定である。

なおかつ、何度も原文を読み直し校注・訳文を参照しながらの読書であるわけだから(読書体験の楽しみを割引いても)、持続して読み進めることは一種の苦行とくに等しい。

読み進むうちに「いみじかりけり」「いとおかしけり」「おもしろし」「あはれなる」とかの言葉の使い方が少しずつ分かってくるのであるが、何通りもの使い分けがあり、現代語訳がいかに難しいかを実感するのである。

ましてや古語の多彩な表現の多くは、どのように前後の文章から推し量ろうとしても註に頼らないと分かるすべがない。前後の文章を行ったり来たりしているうちに、いたずらに時間が経ってしまうのである。

兼好法師は、「自分はもう少し生きられると思っけていても、死はいきなり後ろからやってくる」といったようなことを言い、時間を無駄に費やしてはならないと諭してくれるのであるが、今から800余年前の文章を読むのに右往左往しているようでは、時間を浪費しているようで内心忸怩たるものがあるのは事実である。

## 人間心理の洞察力

『徒然草』は、作者が時折々にふと思いついたこと、思い出したこと、見聞きしたことを、ランダムに書き連ねているのであるが、彼が最も理想とするところは、自分の教養や知識をひけらかすことのない生き方、であるように思われてならない。

人との付き合いで、あることないことべらべらしゃべり散らす人を最も嫌う。中庸こそが彼の人生哲学なのである。ぎらついたもの、あからさまなもの、直接的なものの、白黒がくっきりしたものを彼は嫌う。

清少納言の『枕草子』の愛読者らしい彼は、四季それぞれの風景描写を詩的に描くことが多いが、清少納言のくっきりとした鮮やかなイメージに対して、第一三七段の冒頭で述べるように、

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、(すだれを＝筆者)たれこめて春の行方知らぬも、なおあわれに情けふかし。」

といった茫洋さを好む性癖がある。

古の習俗を懐かしがり、有職故実にこだわり、一時代前の和歌の表現の多彩さを羨む人なのである。

根っからの保守主義者であることは明らかであるが、人間心理に対する洞察力は並々ならぬものがあり、一旦は隠遁生活に入った身であるが、鴨長明同様世間に対する関心は人一倍強い。

兼好法師の深い洞察力の一端を示す叙述は、四季の移り変わりを述べた第一五五段の文章である。

「春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まず落ちて芽ぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪えずして落つるなり。」

### 死後の世界を語らない作者

人間の死期というものを考える例えとして書かれている文章であるが、人間の死も、個々に単に衰え枯れ果てて死んでゆくのではなく、新しい命が押し上がってきて老いたる人を死に追いやるといっているのである。斬新な視点であるといえよう。

彼は、死とは何かということについて洞察しようとしたが、死後のことについては全く触れていない。彼の生きた時代には、ほぼ同時代人である法然・親鸞の浄土宗が普及しており、死後の世界である極楽浄土や地獄の強烈なイメージが形作られていた。

法師とはいえ、彼は特定の宗派の僧ではなく、在家での生活が許される「沙弥」

の身分であり、僧侶として宗派の教義に囚われる必要ははなかった。

とはいえ、死に際の美学についての考察は盛んに行った割には、死後について考察がなされなかったのは、兼好法師が徹底した現実主義者であったことを示している。

彼が生きていた時代は、建武の中興として史上名高い御醍醐天皇の親政時代とぴたりと重なり、またそれに続く内乱時代をつぶさに体験している。

よく言われる彼の「無常観」は、そうした戦乱に明け暮れる世相への敏感な反応といってよく、出家隠遁も単に仏道に帰依したからというわけではないと思うのである。

それにしても彼が内裏の事情に精通しているのは、若い頃内大臣堀川具守(とももり)の家司であった時代があり、主人の娘基子が時の天皇の寵を受け生んだ子供がのちの後二条天皇となるという機縁に恵まれ、宮中に深く出入りできる身分となったという事情があるようだ。

## お喋りへの戒め

しかし、結局そういうきらびやかな生活に嫌気が差し、出家遁世の道を選んだのである。囚われのない自由な身分になったがゆえに、世相一般あらゆることに関心を向け、現実主義者としての生き方を貫くことができた。

兼好法師のそうした同時代への関心の深さがあったからこそ、現代に生きるの私たちはその時代の出来事についての知識をえることができるのである。

出家遁世して後の生活の糧については、解説者永積安明氏に寄れば、執権北条氏の庇護を受けた芸能者(短歌制作、有職故実についての知識伝授等)としての活動によるものではないかと推測されている。

芸能者であるからには、話術の巧みさや適度なおしゃべりは必須なものであり、彼もそうして生きてきたはずであるが、本文でみる限りでは、おしゃべりに対する戒めを述べた件がかなりの頻度で見受けられる。ある場合には、自身へ対する戒めとして書かれたものであるのかもしれない。

いつの世でも、自分は物知りでその道の専門家であるからといって、人の話を遮るようにして得意げにべらべらと喋ることが嫌われるのは、良い印象を持たれないようである。

## 唯円『歎異抄』を読む

<< 作成日時 : 2012/09/16 17:21 >>

2012年9月16日

### 『歎異抄』が先

小学館『古典文学全集 44』所収の内、『方丈記』『徒然草』の次は『正法眼蔵隋聞記』となっているのであるが、上記本と同時に津本陽の小説『無量の光 親鸞聖人の生涯上下』を図書館から借り出して読み進んでいたのも、最後に収録されている『歎異抄』を先に読むことにした。

著者は親鸞の直弟子唯円とされているが、内容はいまさらいうまでもなく親鸞語録とでもいうべきものである。上記作品とともに古典中の古典であり、現代でも注釈書、解説書、小説が盛んに出版されている。

私は信仰心を持たない単なる一読者に過ぎないので、込み入った解釈や宗教用語の解説などは無縁といってよく、これまで行ってきたある書物の読后感想であると思っただきたい。

### 髪を伸ばした僧侶に疑問

親鸞が開基の浄土真宗は実は我が家の宗派でもある。先祖を祀る祭壇は次兄（物故）の家族が管理しているが、私が子供のころは家に仏壇があって、先祖供養のときには旦那寺の僧侶が仏壇の前でお経を挙げていた光景を思い出す。

しかし子供心にも、帯妻し、ふさふさと髪を伸ばしたお坊さんが、供養の読経後に供された刺身を食べ酒を飲む姿を見て、割り切れないような不思議な光景を見る

心地がした。お坊さんというより普通の方が袈裟を着ただけの姿なのである。

このような人が先祖や死者を供養する資格があるのだろうか、と大人になっても思い続けていた。後年、お坊さんにも色々あり、浄土真宗という宗派のみに許された仕来りであることを知った。それは開祖親鸞以来の連綿と続く仕来りだったのである。

当時の天台宗を始め各教団では、僧侶としての自覚のない野放図な生活態度を、糾弾し嘲り笑ったであろうことは疑いえないが、厳しい戒律を守る禅宗でさえも、やがて帯妻を認め魚肉を食するようになる。

余談になるが、キリスト教のカトリック宗派では未だに司祭の帯妻を認めていない。とすると、禅宗僧侶の軟化は、日本人の柔軟な思考のなせる業か、それともこらえ性がないだけなのだろうか、興味深い問題である。

## 惠信尼と結婚

親鸞は下級貴族の家に生を受けたが一八歳で出家得度し、比叡山の堂僧となって修行に励んだ。

二十年に及ぶ修行を経ても煩惱は募るばかりで一向に悟りの境地に達する気配はなく、意を決して山を降り京都の吉水で生涯の師法然と出会うのである。

法然の説教を聞いて彼はその弟子となることを決意する。法然は浄土宗の帰依者であり、一心不乱に南無阿弥陀仏の称名を唱えれば極楽往生できると説き、その余りにも簡潔明快な教義は、貴族から庶民に至るまで京の人びとの心を魅了していたのである。

親鸞は法然の弟子となっていた惠信尼と結婚し、市井の沙弥として生きる決心をする。頭を丸めていても宗派の制約が一切ない沙弥であるので、酒を飲んで生も

のを食べ子供も作る。

しかし彼には強烈な自覚があり、師法然の教え通り「なもあみだぶつ」と唱えるだけで極楽浄土に往生できると説いて回る布教活動に身を挺するのである。

## 越後国へ配流

彼には教団の後ろ盾がないから、お布施や喜捨で生活を賄うほかなく、生涯にわたって裕福な生活とは無縁であった。

浄土宗は帯妻肉食を認め、「南無阿弥陀仏」と唱えさえすれば成仏できるとされるので、無知な人たちからは曲解され易い。

妻を娶ることができるのだから女は何人いてもいいとか、少々悪いことをしても称名すれば救われるとかと説く一部の布教者が出てくるのはむしろやむを得ないことであった。そうでなくても敵対心を抱く他の宗派の訴えもあって、最高教導者の法然、親鸞他そうした教えを広めようとした一部の不心得者が逮捕され、四人が死罪、法然は土佐へ、親鸞は越後へ流されたのであった。

幸いに、越後には妻惠信尼の父親が御家人として鎌倉幕府から領地を拝領して住んでおり、配流されたとはいえ、何不自由なく配流生活を送ることができた。

罪を解かれてからは、一时常陸国へ住み、数年にわたって布教活動を続けた。

## 妻惠信尼との別離

庇護者から離れてからは、布教による喜捨やお布施による以外に生活の手段がなく、一家は相当な窮乏生活を強いられたらしい。

晩年になって、親鸞は京へ帰って著述活動に専念することを決意し、師法然亡き後の京へ帰り、やがて生涯の大著『教行信証』を完成させるのである。

食べてゆくのがカツカツの状況にあって、妻子を養う手段が親鸞にはない。妻惠信尼は断腸の思いで夫と別れて生活することを選ぶのである。

幸いに、妻惠信尼には、武家であった父親が残してくれた小さな荘園が越後にあり、子供や孫たちを連れて越後にわたり、どうにか暮らしを立てることができた。

以後二人は死ぬまで再会することが出来なかった。お互いに阿弥陀仏と認識しあい、助け合いながら生きてきた連れ合いと別れ別れとなることは、死ぬほど辛いことであったであろう。

## 末法の時代に突入

常陸の国に居を定め、温かい人柄と豊かな知識に裏打ちされた信仰一途な生き方は、配流先の越後を始め関東各地に信者の輪を広げていった。

当時世相は戦乱に明け暮れ(源平合戦等)、大地震や旱魃による飢饉が頻発していた(『鴨長明『方丈記』参照)。路上に打ち捨てられた死骸を見るのは日常茶飯事のことであった。

親鸞の説く教えが単純明快なだけであれば、それほど急速に信者が増えるとはなかったはずである。

当時は末法の時代に突入していた。末法というのは、釈迦入滅後2千年をへた後から末法が始まり、それから一万年末法の時代が続くというのである。

時はまさに末法初年を迎えていたのである。

往生できない人は、六界の最下道である地獄に落ちるとされる。地獄に落ちれば、引き臼でひき潰されたり、身をずたずたに切り刻まれたり、炎で焼かれたりする業苦が待ち受けている。しかも、すぐその後に生き返り再び同じ業苦に苛まれるということが際限なく繰り返される。

## 自らを責め続けた晩年

浄土宗は地獄思想とセットとなって普及していったと私には思われる。

「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで地獄に落とされないで済むのであれば、悪を働く人間ほど阿弥陀仏に頼る度合いが大きい。戦場で殺傷を繰り返してきた武士たちや殺人を何とも思わない極悪人が、目の色を変えて親鸞の教えに従っていったことは容易に察せられる。

そうした背景があって『歎異抄』で唯円が記す親鸞のあの有名な言葉、

「善人なほもつて、往生を遂ぐ。況んや、悪人をや」(第三章)

が発せられるのである。

親鸞は自らを愚禿(ぐとく)と名乗り、神格化の素振りは一切見せなかった。

彼は帯妻し子を設けたことを羞じはしなかったが、生涯にわたって煩惱を断つことができなかった自身と厳しく向き合い続けたことは明らかである。

親鸞は九〇歳の長寿を保った末入滅するのであるが、八六歳のとき自らの和讃の中で

「浄土真宗に帰すれども

真実のころはありがたし

虚仮不実(うそ偽りでまことなきこと)のわが身みて

清浄の心もさらになし」

と述べる。続いて第二首で、

「外儀(外面)のすがたはひとつごとに

賢善精進(かしこく善に精進する)現ぜしむ

貪瞋邪偽(欲といかりとよこしまないつわり)おおきゆえ

奸詐(よこしまないつわり)ももはし身にみてり」

### 第三首

「悪性さらにやめがたし

心は蛇蝎のごとくなり

修善の雑毒なるゆえに

虚仮の行とぞなづけたる」

(津本陽『無量の光 下』289～90 頁)

九〇歳という当時としては信じられないほどの長寿を保ち、信仰の伝搬に生涯を捧げてきて人々から聖人と崇められて、もうとつくに煩惱解脱していい死の数年前まで、自らを責め続けたこの精神の若々しさと誠実さが、親鸞という宗教者の最大の魅力である。

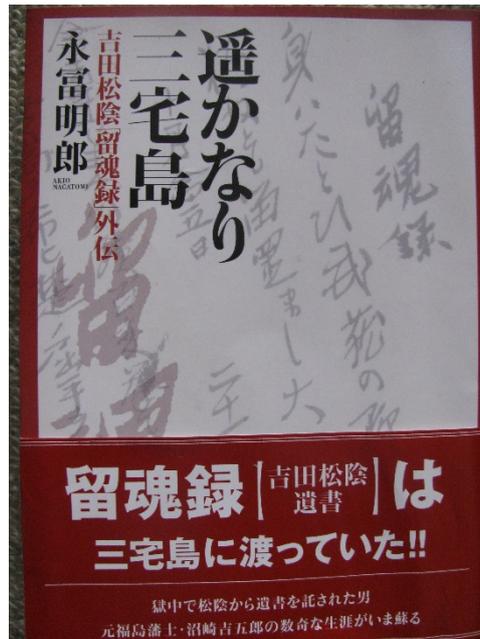
『歎異抄』には、世俗の沙弥として生涯を全うしたからこそ言いうるたくさんの革新的で大胆な言葉が書き連ねられている。

しかし、私にはこれ以上敷衍してゆく気力はない。どうか原典を読んでみてください。

## 永富明郎『遥かなり三宅島 吉田松陰留魂録外伝』を読む

<< 作成日時 : 2012/09/20 07:06 >>

2012年9月19日



待っていました！

待ちわびていた本が遂に出た、という気がしている。

この本の出版計画を著者から知らされていたわけではなく、また何らかの広告で事前に知っていたわけでもない。私は、平成21年出版の同じ著者の手に成る『武蔵野留魂記＝吉田松陰を紀行する』改訂版を読了後、獄舎で松陰と巡りあわせた元福島藩士沼崎吉五郎なる人物に多大の関心を抱いていたからである(筆者のブログ参照)。

沼崎は処刑を目前にした松陰から、松陰の遺書ともいべき『留魂録』その他を預かり、自分の亡き後その書付を長州藩士に渡してくれるよう頼まれた。そうして実に十七年後にその目的を果たすことになった人物であり、松陰との約束を守つ

て長州出身の役人へ書き物を渡した後、遥としてその行方は途絶している。まことに興味津々たる人物なのである。

その沼崎が主人公となった小説が上梓されたのであるから、「待ちわびていた」という表現は誇張でも何でもなく、まさに当を得たというべきである。

### 「無頼の輩」ではない

著者が『武蔵野留魂記』を書き上げた段階では、沼崎がどのような人物であったのか調べがついてはおらず、その後伝手や独自の調査で少しずつ分かってきたようである。そうしてついに、沼崎は出獄した後、十七年にもわたって三宅島で流人として暮らしていたことが突き止められた。

その段階で著者の小説の構想が一気に膨らんだものと思われる。捕縛投獄の罪状は「婦女切害」と島の流人帳に書き留められている。それがどのような事件であったか今となっては分かるすべはなく、作家の想像力に委ねられるしかない。

当時の資料などでは、沼崎は「無頼の輩」と記されることがあったが、著者永富は、獄舎で預かった書付を十七年間肌身離さず持ち歩き、依頼者の願いをついに果たしたような人物が、「無頼の輩」であったはずはないと推測している。

なおかつ、その重要な書付を役人に手渡す時、金子その他の要求をした形跡がないことも、彼が高潔で意志の強い武士であった証拠としており、「無頼」説を退けている。

### 優れた小説の条件

その確信が「切害」場面の描写によく表現されている。

「切害」は事故として描かれている。それ以上ないといえるほど妥当な小説的創作といえる。

婦女二人に絡む大身旗本の子弟らしき不逞の輩の狼藉を止めようとして、抜刀した相手の刀が婦女の一人に誤って刺さってしまったことを自分のせいになされた。奉行所でどのように弁明しても言い訳は通らず、大身旗本側からの横槍によって犯行は沼崎のものとされ、刑が確定したのである。

このあたりの創作の筆は淀みがなく、読者は納得しつつ先へ読み継ぐことが出来る。

小伝馬牢の揚屋(あがりや)で二度も松陰と顔を合わせることになり、時世や自分の考えを滔々と述べ立てる吉田松陰という長州出身の若者に、次第に感化され傾倒してゆくくだりは迫力があり、前半の小説的な盛り上がりを形成している。

そうして、処刑を目前にした松陰から書付を託されたとき、沼崎は、これからどんなことがあっても、この書付を長州の人に渡すんだ、と決心をして三宅島へ流されてゆくわけである。

小説としての破綻はほとんどなく、急かされるように先へ読み進んでゆく心の高揚を持つことが出来るのは、優れた小説の条件である。

### 山岡鉄舟の墓名碑

島へ渡ってからがまた面白い。これまで流人の生活に関して詳しく読んだ経験はほとんどなく(確か吉村昭の短編小説に島抜けの話があったのを読んだ記憶がある程度である)、島での生活の様子が活写されており前半部にも増して一気に読み進んだのであった。

島での生活のなかで、侠客の小金井小次郎が同じ流人仲間として登場するが、

私は数年前まで小金井市に住んでいたことがあり、市域の散策のおり、ある小さなお寺の墓地で小金井小次郎の墓を見つけた。

その当時私は小次郎についての知識はなく、注目したのは墓石に大きく刻まれた「小金井小次郎の墓」という文字につての説明板の文章である。

そこには小次郎の事跡とともに、字を書いたのが、幕末の剣豪山岡鉄舟との説明があったことである。

私は剣の修練に励む一剣士として、一通りは鉄舟の伝記等を読んでいたので、鉄舟が小次郎と同じ侠客清水次郎長と懇意であり、次郎長の墓碑銘もまた鉄舟の筆になることを知っていた。

鉄舟は剣術だけではなく書道家としても知られており、世に出回る鉄舟筆の書は数えきれないほどであるという。

それにしても、山岡鉄舟という人は侠客がよほど好きであったのであろう。

自身も大いなる侠気を備えた人物であった。むろん、小次郎の師であり恩人でもあった大侠客新門辰五郎とも懇意であったことは十分に想像できる。

## 侠客小金井小次郎

余談が長くなってしまったが、小金井小次郎が島での物語に登場することによって、小説の構想は大いに膨らむことが出来たといえよう。

水が貴重な島に、小次郎が作った飲料用の井戸(池)のことが出てくるが、著者は、遠流の期間が早く終わるように、その筋に働きかけるための工作ではないかと疑いの目を向けている。しかしおそらく小次郎にはその意図はなかったものと思われる(何の根拠もないのであるが)。

井戸掘りの行動は純粋に彼の俠気によるものと思いたい。後年、罪を解かれて故郷の小金井で暮らす彼が、炭焼窯を作るため島へ渡ったという事実は(火山の噴火のために成功しなかったのであるが)、自分が長年世話になった島へ恩返しをしたいという俠気の噴出であったことは疑いえない。

本国では、幕府の要人と深いつながりのあった侠客新門辰五郎の小次郎赦免への働きかけがあったことは十分に想像されるが、画期的な島の用水池掘りの仕事は、小次郎の島人を思っただけの純粋な行動であったとした方が後味が良かったのではないか。

### 約束を守り通した武士道

沼崎と前後して流されてきた流人たちが、島での生活に溶け込むようになった頃、幕府が瓦解し、旧幕時代に島へ送られてきた人たちが次々と赦免されて本国へ帰って行ったにも拘らず、沼崎他十名はいつまでたっても赦免の知らせは届かなかった。

旧幕時代の書類の不備とされているが、小説では、島に溶け込んで重要な役割を果たしつつある沼崎を、本国へ返したくなかった人たちが仕組んだ計画であったと小説は述べる。

もしかしたらそれ相応の理由があったと想像することもできよう。沼崎が犯したとされる「婦女切害」も歴とした殺しであったのかもしれない。

しかしそれらの可能性にあえて言及することすらなく、松陰の『留魂録』を守り通した沼崎を、松陰の弟子として加えることを熱く訴えるこの小説の著者の判断に、私は全面的に賛同したい。

そうして、長州人にとっては飛び切りの「お宝」であるはずの直筆『留魂禄』を持ち込んだ人物に対して、何の謝礼も感謝の接辞も伝えることのなかった神奈川県権令野村靖の不手際な対応に、私たち読者はともに強い憤りを覚えるのである。

野村の前から姿を消し消息を絶った沼崎が、島へ帰る決心をする件は感動的である。

その決断は読者にカタルシスを与えてくれる。島には彼を夫として仕えてきた女性や仲間たちが待っている。沼崎の結末はそれ以外のことは考えられない。

著者は多くのノンフィクション作品をすでに何冊も刊行しているが、小説は初めてであるという。

しかし初めてとは思えないほど構想がしっかりしており物語に破綻がない。松陰好きの人たちに止まらず、広く多くの人がこの小説を手にとることを望んで止まない。

発行所 東洋図書出版株式会社

727-0849 山口県防府市西仁井令 1-21-55

0835-25-1598

2012年8月31日初版発行

## 『正法眼蔵隋聞記』を読む

<< 作成日時 : 2012/10/28 15:09 >>

2012年10月28日

### 強いられた緊張と覚悟

この著名な古典をひもとくに当たって、いくばくかの緊張感と読み通す覚悟を要したが、意外にすらすらと読めたので安堵した。

この作品は道元禅師の弟子であった懐奘(えじょう)が、師の言動を記録して成ったものである。そういう意味では、親鸞の言動を弟子の唯円が記録した『歎異抄』と書物の体裁は同じである。

ちなみに、「正法眼蔵」とは、「仏教という正しい教法の精髓を漏らすとろなく集成した書物」という意味とのことである(訳・校註の安良岡康作氏)。

こうした題名からしても、『隋聞記』の内容は、教義の難しい解釈や解説の羅列ではないだろうか？という偏見をもって臨んだので緊張を強いられたのであるが、教義そのものについての解釈・解説は意外と少ない。

僧侶としての在り方、座禅の意義などについて分かりやすく叙述されており(原文は漢文ではなく漢字とカタカナ交じりの文章であるが、この本ではカタカナがひらがなに直されている)、大宗国での研鑽の日々を興味深いエピソードを交えて述べるなど、一気に読み進むことのできる章も多かった。

### ひたすら座禅あらんのみ

「なむあみだぶつ」と唱えるだけで極楽往生できるとする親鸞の浄土真宗(他力

本願)とは異なり、禅宗は、僧としての困難な修行と研鑽の末悟りを得る宗派(自力本願)という思い込みがあったのは事実である。

しかしながら、道元は、難しい書物を読んだり厳しい修行に明け暮れることは必ずしも必要ではなく、ただ座禅すれば悟りを得られると述べる。ひたすらに座り続けることが修行であり悟りへの道なのである。

さらにまた、真摯に求道の道を歩めば、

「もし、この心あらん人は、下智・劣根をも云わず、愚痴・悪人をも論ぜず、必ず、悟りを得べきなり。」(二ノ十五)

と、親鸞の「善人なをもて往生を遂ぐ。況や悪人に於いてをや」という言葉を彷彿させる言辞を吐いてもいる。

とはいへ、悟りを得るためにひたすらに座り続けるということは必ずしも容易なことではない。

そのためには、手職も家族も世間との交わりも一切断つ覚悟が求められるからである。座禅自体が修行なのである。それを只管打座(しかんだざ)という。

食べなければ人間は生きていけないから、差し迫ったときはの乞食(こつじき・鉄鉢を差し出して食を乞うこと)は認められている。

## 栄西禅師の訓戒

道元は、余計なものを所有したり蓄財することを厳しく戒めた。身を覆う衣と鉢とかゆ一杯があれば、他は何も要らないという。

京の建仁寺時代の道元の師でもあり、同じく宋に渡って修行した臨済宗の栄西禅師についてのあるエピソードを述べている。

禅師が建仁寺の住持であったとき、檀家の貴族から絹の反物を貰って寺へ帰っ

てきた。寺では米櫃がすでに底を突いており、腹を空かしていた修行の僧たちは大いに喜んで、反物をお金に換えて米を買おうとしたところへ訪ねてくる者がいた。

「今自分はお金を必要としている。いただいてきたという反物を恵んでいただければ、飢え死にしないで済む」

とその者はいう。栄西禅師は躊躇なく反物をその者に与えて引き取らせたという。

不平を述べ立てる僧侶たちに対して、

「一日や二日食べなくても死にはしない。その代り一人の民間人が救われたのだから、修行者たるものはそれで良しとしなければならない」

と訓戒したという。宗教の功德と修行者の在り方の原点はその辺りにある。

後に道元は栄西の臨済宗とは異なり、曹洞宗という宗派の日本における始祖となったが、栄西の人となりを尊敬しており、何度も栄西について言及している。

## 如浄和尚の教え

道元という人は貴族出身であった。それも父親は内大臣久我通親(くがみちちか)、母方の父は時の関白藤原基房(ふじわらもとふさ)という大貴族の子息であった。

彼が大宗国に渡れたのも、優秀な学僧であったというだけではなく、親のコネと財力なくしては考えられない。入宋後雲水として各寺派を巡り歩いたが、天童山景德寺の住持如浄(によじょう)和尚と出会って深く帰依し、ひたすらに只管打座して悟りを得た。

彼が帰国後越前の深山幽谷に寺を構えたのも、(世話をしてくれる在家信者が居たとはいえ)如浄禅師の帰国に際してのはなむけの言葉があったからに他なら

ない。禪師は、

「国ニ帰ラバ、化ヲ布キ、広ク人天ヲ利セヨ。城邑・聚落ニ住スルコト莫レ。国主・大臣ニ近ヅクコト莫レ。只、深山・幽谷ニ居シテ、一個・半個(注、少数の求道者)ヲ説得シ、吾ガ宗ヲシテ断絶ヲ致サシムル勿レ」

と訓戒した(解説文より引用)。

偉大な師に巡り合うというのも大きな才能の一つである。道元はそうして大成し、九十余巻にもわたる『正法眼蔵』その他を著述し、建長四年(1251年)五十三才の若さで入寂した。全身に腫物ができる奇病であったという。

ちなみに、『方丈記』の鴨長明は1212年六十一才で、『徒然草』の吉田兼好は1352年前後の七十才頃、親鸞は1262年九十才の長寿を全うして入寂している。

2012年10月28日



### 夕顔の忘れ形見

今回の帖は「玉鬘」である。長編の帖なので全編を一気に語り切るというわけにはいかず、後半を少し残し次回に回すということになったようである。

それにしても、いつもながら人間関係が多岐にわたり複雑に絡み合っているの  
で、聴き手に人間関係が一見して分かるように図表が掲げてあった。

今回の主人公である玉鬘は、第四帖で語られた夕顔の忘れ形見である。夕顔というのは、源氏の友であり競い合いの相手でもあるかつての頭の中将(今は内大臣)の思い人だった人であり、姫はこの二人の愛の結晶なのである。

夕顔は源氏が通りすがりの垣根越しに見つけた女君であり、その奔放で愛らし

様子にたちまち虜になってしまう。逢瀬を重ねているうちに、夕顔は悪霊に憑りつかれてぽっくりと死んでしまう。

ごく一部の人間を除いては、夕顔の存在は知らされておらず、源氏の見送りの下ひっそりと荼毘に付され、斎場の煙と化してしまう。

それだけに源氏にとっては忘れようにも忘れられない女性だったのである。



## 田舎武士の登場

その夕顔には身边を世話する右近という女房がいて、夕顔の死後源氏が引き取り身边に仕えさせている。

右近も夕顔のことは秘密にしている誰にも話さない。しかし、源氏の心は痛いように分かっており、なおかつ忘れ形見の姫の行方を人知れず探し求めている。

実は姫君は、乳母の夫であった人が筑紫の太宰少貳に任ぜられたときに、共に任地の筑紫に連れられて行ったのである。

九州の肥前という(京にとっては)片田舎で育てられたにも関わらず、姫君は世にも美しい女性に成長する。その美しさはたちまち近隣に評判を呼び、恋文を届けて

寄越したり結婚の申し込みが後を絶たない。

しかし、乳母側は「この姫君は身体に欠陥があっても結婚できるような状態ではない」と偽ってその都度断るのであるが、そのうち、その辺り一帯に勢力を張る大夫の監(だいのげん)という武士が絶世の美女の噂を聞きつけて、結婚を申し込んできた。

彼は、どのような身体の欠陥があっても自分はものともしない、願いが適えば自分の後の位にも劣らぬほどにお扱いたす、と大層の執心ぶりである。

武士は三十才ほどになる中々に頼もしい風采で精力的な感じのする好漢であるが、しわがれ声の訳の分からない方言でしゃべり続ける。

大夫の監がしゃべる部分を、語り部智子さんは、武士らしい堂々とした野太い声を出し大いに雰囲気盛り上げる。女優として鍛えた声と経験が見事に生かされている。

乳母側は態良くいなしてお帰り願うものの、あからさまに断りでもしたらどのような報復を受けるかもしれないと思い、肥前を脱出する決意をするのである。

乳母の夫である太宰少貳はすでに亡くなっており、また結婚したり子供を設けていたりする女房やお付の人たちも、夫や妻子を捨てて脱出することに同意しており、身の回りの物だけを手にして早舟仕立てで京を目指すのである。

## 我が娘の名はかづら

さてここで少し私的な余談を述べることをお許し願いたい。

というのも筆者の前妻との間に生まれた長女の名はずばり「かづら」というのである。

大学の国文科出身の前妻は『源氏物語』を読んでおり、絶世の美女として描かれ

る玉鬘からぜひその名を貰いたいと思い「かづら」と命名することを主張した。

私は、少しばかり突飛な命名ではないかと反対であったが押し切られてしまった。私がその時『源氏物語』を読んでいたら、すぐさま賛成したであろうと思われるのだが……。

生まれた娘は切れ長の一重まぶたであったが、私に似て鼻の先が丸くお世辞にも絶世の美女というわけにはいかなかったが、素直で明るい性格が救いといえれば救いであった。

しかし、中学時代、名にまつわるいじめを同級生から受け、泣いて私に訴えたことがある。同級生は かづら ではなく「かつらかつら」と呼んで嘲るというのである。

私は、

「お前の名は、『源氏物語』という有名な古典文学に出てくる、玉鬘というやんごととなきお姫様の名から頂いてお母さんが命名した高貴な名なのだ、同級生たちに言ってやれ、あんた方にそんな高貴な名をつけられたひとがいるのか、とな」と言って宥めた。

娘がそう言ったかどうかは聞かなかったが、やがて「かつら」と呼ばれることも無くなっただけ。自殺寸前とはいかなくても相当に悩み苦しんでいた様子であったから、いじめが収まって本当に良かった。

いま娘は結婚して一男を設け横浜に住んでいて、会うことはほとんどないが、その名を誇りに思ってくれていればそれでいい。余談終わり。

## 玉鬘のハーレム入り

玉鬘を擁して京へやって来たものの、頼る術がなく困惑して長谷寺にお参りしたところ、たまたまその日お参りに来ていた夕顔の女房であった右近と出くわし、お

互いにその奇跡的な偶然の出会いに感激して泣き濡れるのであった。

もちろんそのことは現在の右近の主人である光源氏に伝えられる。冒頭の場面はともかく、源氏はここで初めて登場するのである。

話を聞いて喜んだ源氏は、成人した玉鬘を見て、母親の夕顔によく似た面差しと、母親よりはるかに気品のある美しい女性に成長した姫君に気を良くし、自ら造り上げた六条の宏大なハーレムの一角に住まわせることにするのである。

実父である内大臣には知らせず、自らを父親に見立て噂を聞いて群がってくる男たちの反応を楽しむ算段である。もちろん、源氏の生来の好色が密かに頭をもたげてくることを十分に意識しながら……。

頼る当てがなく途方に暮れていたお付の人々も、片田舎の九州とは打って変わって華やかな京の生活に親しむことが出来ることになり、大喜びである。

語りの終了後、語り部智子さんは、風邪気味で聞き苦しいところがあったと思うと詫びたが、ところがどうして、大夫の監のところでも述べたように、人物によって巧みに語調や声の高低を変え、また歌の読み方に変化をつけ、いつもにも増して好調な語りであったと思うのである。

この日は土曜日で、予約をしていたのは翌日の日曜日であったが、都合で土曜日に換えたので打ち上げの席には出席できなかった。そのことが少しばかり心残りである。

## 文武両道塾御嶽山合宿

<< 作成日時 : 2012/11/05 21:27 >>

2012年10月20日



### 目の色の変わる試斬稽古

文武両道塾の御嶽山合宿(二泊三日)は、昨年に続いて二回目である。

去年は9月の連休であったが、今年は10月にずれ込んだ。

合宿の目的は、修行項目を集中的に連続して行い、業と心身を磨くことにあるが、同時に仲間の連帯感を深めるという重要な役割がある。

今回は総勢4人という少ない人数であったが、それだけに個々の業の錬度が確実に高まったといえると思う。 翌週には昇段審査を控え(合宿終了後、11月の末に延期となった)、来月は刀道全国大会が開催されるとあって、その対策に稽古を集中させた。

合宿参加者3名の内二人が三段を受けることになっている(一人はすでに三段取得)。

現在の刀道の昇段審査は、初期の頃とは違って格段に難しくなっている。新しく

初伝、中伝の制定居合が加わったためだ。

型だけではなく、すべて試斬が出来なくてはならない。居合であるから抜き打ち技が決定的な位置を占める。抜き打ちの袈裟、逆袈裟、水平(五段以上)で失敗なく巻藁を両断出来る人は、刀道連盟全体で師範を含めて数人居るかいなかであろう。

しかし審査では、審査項目に入っている以上それが出来なければならない。勢い全員目の色が変わり体中に気力が満ちて真剣そのものである。

同じ技を三回行って二度成功すればよいほどである。確実に合格となるためには、三回とも成功しなければならない。目の色が変わらざるを得ないのである。

人数4人に対して60本の巻藁を用意した。私はほとんど斬らないので、一人当り15本ほどになる。二日間にわたって行うからそう多いわけではない。

カメラは私が持っていったのだが、指導に夢中の余り弟子たちの稽古風景を撮ることが出来なかった。(それでは弟子たちに気の毒なので、別の道場で撮影した画像を掲載しておきたい。)稽古風景としては、最後に私の片手水平斬りのシーンが一枚あるのみ。





ビール缶斬り

稽古を終了して夕食後のくつろぎのひと時、毎年の恒例となった酔興「ビール缶斬り」で、一番若い後藤が見事500ミリ缶を両断し(動画)拍手喝采。

実は500ミリ缶の両断はそう難しくはないが、350ミリ缶となると途端に難しくなる。

缶の上と底との間は10センチほどしかなく、両断出来る角度は限定される。数ミリの誤差も許されな それを抜き打ちで斬るとというのが眼目である。私は毎年の合宿でそれをやる。しかし、今回は動画で撮影したのであるが、技術上の問題か容量を超えているせいか、このブログにアップできず画像はなし。両断された缶の映像は、若手の後藤君が斬ったものである(そのシーンも動画(失敗したので載せることができないのだろう、などと夢思うなかれ)。

翌日も昼食のおにぎりを宿から差し入れしてもらい、終日試斬稽古の没頭したお蔭で試斬台の鉄の支柱が根元から折れるという事態を招いてしまった。

一日中真剣を振り続けた三人はダウン寸前というありさま。これで夜の酒と飯が格段に旨くまた待ち遠しくなるという仕組みである。

酒席の余興に、この宿のチャーミングな女将がどのようにして御嶽神社の神人(じにん)でもあるご主人と出会ったかということ、各自推測して発表しあうということを行った。

後ほど酒の注文のためにやってきた女将にそれぞれの推測を発表したところ、すべて外れであると優しげに申し渡された。

普通の発想では考えもつかないような出会いが二人にはあったのである。しかし、ここで表すことは止めておこう。御嶽山荘を利用するお客たちのお楽しみということにしておきたい。



## 吉川英治記念館

翌朝精算を済ませて宿を出たのが10時。

ケーブルカーで山を降りた場所の駐車場に、木下さんの車が二泊三日の駐車中である。車に乗り込んでいざ東京へという段取りであるが、せっかく御嶽まで来たのだからということで、関東の日本酒蔵元として名高い「澤の井」を訪ねることにした。

訪問者は係員の丁寧な説明を聞きながら酒造現場を見て歩き、製造されたばかりの吟醸酒を振舞われる。美味しい。ただ酒となると格段に味が濃くなる気がする

のは私だけではあるまい。

一時間ほどを澤の井で過ごし、青梅市郊外にある吉川英治記念館を訪ねる。

私は20年ほど前この場所を訪ねたことがあるが、そのときはまだ未亡人がご健在で、訪問客に対してお茶を提供していただいた記憶がある。

夫人はすでに亡くなられたのかもしれないが、現在はそうした温かいもてなしなど無縁で、受付の窓口があって館内を巡るだけのステロタイプ化された単なる記念館となっていた。

記念館の内部は撮影禁止とのことであつたが、係員が附いて回るわけではなく、何点か無断撮影をさせてもらった。ここに掲載する何点かの写真がそうである。

私はむろん英治の『宮本武蔵』全巻を読んでおり、館内に展示されている『新平家物語』『新書太閤記』なども読破した経験があり、その背表紙が何とも懐かしく思われた。同様に展示されている英訳本の『MUSASHII』はアメリカでベストセラーになったとのことである。

国民作家と呼ばれる吉川英治の偉大さが伝わってくる展示である。

それともう一つ、書齋から見渡せる庭の風景は絶品で、その中央に樹齢500年ほどは経ていると思われる巨大な楠木が圧倒的な存在感を誇って聳え立っており、稀代の大作家の精神的バックボーンを成していたように思われたのである。

記念館を後にして、近くの蕎麦屋で昼食。一気に東京へ向かう。









## アンジェイ・ワイダ監督『苺蒲』を観て

<< 作成日時 : 2012/11/10 10:30 >>

2012年11月10日



### 若々しい巨匠たち

前回と同様知り合いから岩波ホールの上映映画の招待券をいただく。

どういう映画の招待券も分からず頂いたのであるが、何とあのポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダの監督作品であった！

この高名な監督の作品は『地下水道』『灰とダイヤモンド』以降観ていなかったのであるが、チケットでその名を見て、未だ健在で映画を創っていつという事実と直面して少しばかり驚いた。

少しばかりというのは、その前に、現代フランス映画の巨匠ともいべきアラン・レネ監督の『風にそよぐ草』という映画を観ることが出来たからであった。

この作品を撮った時レネは89才であったという。であればワイダ監督もそれ相当の歳であるはずである。

パンフによれば86才とのこと。レネと三歳の違いしかない。

若かりし頃の私たちが虜にしてくれた名匠たちが、老いてなお新作を次々に発表する姿は感動的である。しかも、どちらもその腕はいささかも衰えてはいない。それどころか、前衛的思考を強めているところが新鮮である。



## 両巨匠の不思議な符牒

レネの『風にそよぐ草』は、観客を翻弄すかのごとき意味不明のラストシーンを用意して、あたかもヌーベル・バーグ時代の前衛性を誇示してくれたが、ワイダの『菖蒲』は、複雑な構成ではあるが、意味不明(監督には必然性があるのであろうが)の映像はどこにもない。きわめて明確である。

ただし、符牒を合わせたかのように、この二つの作品には共通した手法がみられる。

まず題名である。レネの作品の題名には「草」という文字があり、ワイダの映画は「菖蒲」(しょうぶ)である。この草は水辺に生え、我が国でも馴染みのある水草である。

レネ作品の冒頭、ヘリコプターから撮ったと思われる映像は、風になびく草原の草である。一方ワイダの映画の冒頭シーンは水中で揺れ動く菖蒲の映像である。なぜこうも類似しているのかと思わせるほどである。

まだある。主人公に起用している女優は、レネの場合はサビーヌ・アゼマ、ワイダはクリスチナ・ヤンダという長年監督作品に出演してきた女優である。

新たな挑戦という課題を掲げて、新人ないしこれまで起用することのなかった俳優を登場させてもよかったのであるが、馴染みの俳優を使ったのは、単に気心が知れているというだけではなく、遺作になるかもしれないという気持ちから、気心の知れたスタッフによる集大成を意識していたのかもしれない。

## 三つの場面と三つの死

さて、レネは現代人(都市生活者)の精神の歪みないし異常を描いた。ワイダは、その後にくる死をテーマに描いたのである。

ワイダ監督は86才という高齢からして、常に死というものと向き合っていると思われる。死がいつ訪れても不思議ではない年齢なのである。

しかも死は予告してやってくるとは限らない。不治の病であるガンは死を予告してやってくるが、事故は突然やってくるのである。その二つの死をワイダは描いている。

この映画は、『菖蒲』と題する映画を創ろうとして、映画制作にまつわるエピソードを挿入し、映画の中の映画というスタイルをとっている。なおかつ、映画の中の映画の主人公であるクリスティナ・ヤンダが、実生活にまつわる現実の話として、映画『菖蒲』の撮影監督となるはずであった夫をガンで亡くしたエピソードを語るシーンが差し挟まれる。

作中「映画」としての物語(主人公マルタは、肺がんが全身に転移し死はまじかに迫っている)、映画の撮影シーン、そしてヤンダのガンで亡くなった夫の回想、という三つのエピソードが説明なしに進行するので、観客である私たちは戸惑い惑乱するが、チラシなどの助けを借りて注意深く最後まで見ると、レネのような難解な映像は挿入されていない。

### 映像の魔術(詐術)

ただ、最後のシーンで少し面食らった。

映画の最後は、知り合いになった青年が、主人公の中年女性マルタ(クリスティナ・ヤンダ)の要請で、川の対岸に繁茂する菖蒲を泳いで取りに行き帰ってくると

き、突然溺れるシーンがある。

そのときマルタは惑乱したかのようにその場から走って逃亡し、橋の上で手を挙げて走る車を止め、倒れこむように車の後部座席に横たわり運ばれるシーンがある。

その直後、また青年が溺れるシーンがあり、今度はマルタが逃げないでその場に止まり、助けを求めるシーンが続く。青年は助け出されるがすでに溺れ死んでおり、マルタは青年の身体を抱きしめ頬擦りして彼の死を嘆く。その場面で映画は唐突とっていい終わりとなる。

どちらの映像が映画の中の映画なのか、映画が終わった段階でしばし呆然となるが、クレジットタイトルが流れる中、座席に座り続けて思考を巡らせるうち、青年が溺れる場面で主人公が逃亡するシーンは、『菖蒲』映画撮影中の一シーンであることに思い至るのである。

観客も私とほぼ同じ疑問ないし惑乱を感じたとみえ、座席から中々立ち上がらなかった。こうした場面もレネの『風にそよぐ草』と酷似している。

レネ作品のラストシーンは、これまでのシーンとは全く無関係な母子の会話の場面が挿入され、ベッドで就寝しようとする幼い女の子が母親に向かって、「猫の餌を食べれば、猫になれるの？」と問いかける場面で映画はFIN(終わり)となる。

映画が終わった後も観客は座席から動くことが出来ず、沈黙考していた。

私に言わせれば、このシーンは映画のストーリーとは関係のないレネのいたずら心でしかない。意味を読み取ろうとすると、映画史上最も難解と言われた映画、『去年マリエンバードで』と同様のアポリアに落ち込むことになる。映像の魔術(詐術)を見極めることが肝要である。

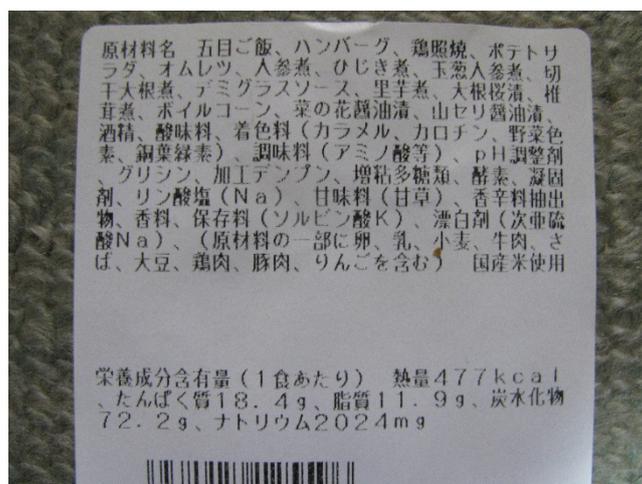
ワイダ監督がこのような複雑な映画を創ったのは、唐突に訪れる死が誰にも可能性としてあり、どんなに若くても死はいつも身近にあるものなのだ、と自らの死を見つめつつ呟いた私映画であるというべきであろう。

神田「岩波ホール」で上映中。(冒頭の写真を除いて、他の写真はすべてパンフより転載させて頂きました。)

## 食品添加物の多さに驚く

<< 作成日時 : 2012/11/23 14:19 >>

2012年11月23日



### 異常に多い食品添加物

先日店からの帰りが遅くなったので、駅に併設されたスーパーで幕の内弁当を買って帰った。

温めた後まずアルミカップに盛られたポテトサラダを食べたところ、「ムカッ」ときたので食べるのを止め、煮物野菜に箸を付けたところ、これもむかつきをおぼえた。むろん賞味期限を過ぎた食べ物ではない。

むかつきの原因は、増粘多糖類などの添加物の入った食品特有のあの味にあることは確かである。私は食べるのを止めて、容器の裏に張ってある成分表を見たとき思わず鳥肌が立ってしまった。

上に成分表を掲げてあるので読んでもらえば一目瞭然であるが、字が細かいのでここに列挙してみる。

「酒精、酸味料(アミノ酸等)、PH調整剤、グリシン、加工デンプン、増粘多糖類、、酵素、凝固剤、リン酸塩(Na)、甘味料(甘草)、香辛料抽出物、香料、保存料(ソルビン酸K)、漂白剤(次亜鉛酸Na)」

以上である。

驚くべき数である。使用目的からすると色々理由はあるのであろうが、こうした弁当は一日が過ぎると売れ残りは廃棄されてしまう。従ってまず保存料とかは必要であるとは思えない。また凝固剤等も丸一日の寿命でしかないスーパー弁当に必要であるとはおもわれぬ。

使用目的不明の添加物名が幾つかあるが、これらは図書館等で調べていずれ発表したい。

### 食品に漂白剤！

ぞっとさせられたのは、「漂白剤」が入っていることである。これはいったい何のために使われているのか？

日本人は料理の「見てくれ」にひどくこだわる。色、形、味、すべてそうである。特に色具合には敏感で、配色に気を使うあまり、赤や黄色や緑の着色料を使用して配色の妙を引き立たせようとする。黄色や緑の着色料は有毒とされているものにも関わらず、である。

一般のレストランや料亭ではむろん添加物を使うことはないが、スーパーやコンビニで売られている弁当類は、添加物の宝庫であり、容器の裏の成分表を読めば、恐ろしくなって次から買う気はしないほどである。

これらの添加物が人体にどのような影響をあたえるのか、詳しく研究され発表さ

れたた様子がない。

欧米に比べて日本は食品添加物が異常に多い、と何かの本で読んだことがある。色、形、味にどこまでもこだわろうとする日本人の性格の特異性がそうさせていることは明らかである。

しかし、得体のしれない病気やガンの原因ともされるこれら食品添加物を、人体を損なってまでも使用することに拘るのは異常としか言いようがない。本末転倒である。

## 上げ底精神

「見てくれ」にこだわるあまり「ごまかし」までやってしまうのである。上げ底がその典型的な例である。

上蓋いっぱい食品が詰まっているように見えても、その分だけ底が凹んでいる。飲み屋の徳利だってそうだ。一合徳利として出てくる容器の底は深く凹んでいて、七石ほどの容量しかない。これも上げ底の最たるものである。

一体に、私は日本の文化を「上げ底精神の文化」と命名している。「見てくれ」にこだわるあまり、上げ底精神が徹底しているからである。形ばかりが立派で、偉そうで、整っているように見えても、外見に内容が伴っていない。

幕末に日本にやって来た英国公使オールコックは、幕府の正使と会談して了解事項が成立しても、会見の場に必ず同行する目付が反対すれば、たちどころに約束が反古にされるということを言っている。影のように付き従う目付こそが実権を握っているのである。これこそが「上げ底精神」の見本であろう。

## 添加物の入っていないキムチを

私はキムチのことについて以前このブログで書いたことがあるが、10年ほど前は韓国キムチには人工添加物が一切入っていなかった。しかし、日本で生産されるキムチに赤い着色料と保存料が使用され、見た目に鮮やかで日持ちがする品物が安く流通するようになって、本場キムチの売れ行きに影響するまでになった。

そこで韓国側は、自国キムチにも着色料や保存料を入れて輸出できるように日本政府に働きかけ、着色料や保存料の入った韓国キムチが出回るようになった。悪貨が良貨を駆逐した典型例である。

私は今や韓国原産と明記されていても、大好物のキムチを買う時に内容の成分表を必ず確かめ、添加物が使用されていないキムチを買うことにしている。

輸入物には添加物が含まれていないキムチ(日本製より若干高い)が未だあるが、日本製は添加物が含まれていないキムチは皆無である。

唐辛子の赤さだけでどうして不足なのか不思議でならない。むしろ着色料で真っ赤になったキムチが気味悪く感じられるほどだ。

せめて、韓国の食品業界は日本食品の悪弊を真似ないで欲しいと思うのは私だけではあるまい。見てくれのみを重視して本質を見失った日本の「上げ底精神」と早く決別して欲しいものである。

2012年11月24日



### 創美流華道会館で講演

去る18日、東久留米市の創美流華道会館で行った講演について報告します。

毎年行われている大多摩華道連盟(本部・創美流華道会館)主催の『伝統文化芸術指導者育成教室』の講師に選ばれ、講演を行った。

10月から来年の1月に亘って計五回行われる講演の第二回目である。昨年も講師として招聘され、「花を切ること 人を切ること」というテーマを与えられ、むろん人を斬ったことのない私としては戸惑い慌てふためいたのであるが、「人を斬るのは自分が斬られることでもある」とテーマをすり替え、古の剣豪たちのエピソードを織り込みながら、何とか乗り切ったのであった。

今年は、テーマを自由に選んで下さいということであったので、表題のタイトルで話をさせてもらことにしたのである。

私が副会長を務める「ジパング文化普及会」のメンバーたちが駆けつけてくれ、2

0人に満たない会場を盛り上げてくれた。会長の書道家山後墨仙先生が真っ先に駆けつけてくださり、「講演を楽しみにしています」と励ましていただき、大いに張り切ったことは疑いない。

講演内容は予め文書にしておき、適時思い付いた事柄を差し挟んでいく、という形式をとった。以下がその講演内容の要旨である。

### 技以上に魂を錬る

私は現在全日本刀道連盟という組織に加わっているが、思うところがあり「刀道・文武両道塾」という新しい団体を結成し、10人ほどの弟子に私流の技を付け加えて教えている。話は、何故「文武両道塾」なのかということから始まる。

私は以前『武士の心 日本の心』(上下巻 高橋富雄著 近藤出版社)という本を読んだとき、その中で著者が中国の古文献にある言葉として、

「武備ある者は必ず文事あり而して文事ある者は必ず武備あり」

と引用されている文章を読んで、これだ！と膝を打ったのであった。

私は主として古武道としての剣術を教授しているが、日本武道は技と同程度にあるいはそれ以上に精神の修業を重視する。魂(精神)の錬れていない人がいくら技を教えても、それは日本武道を教授したことにはならないのである。

昔の剣豪たちが死に物狂いで技の習得に励むかたわら、禪に打ち込み、あるいは深山幽谷に籠り、滝に打たれ、野山に野宿しながら武者修行に命をすり減らしたのは、ひたすらに魂を錬るためであった。

例えば宮本武蔵が類い稀な剣豪として後世に語り継がれてきたのは、ただ強か

っただけではない。剣客であると同時に書画を良くする文人として、ひたすらに魂を錬った人でもあったからである。

## スティーブン・セガールの合気道

私は映画でハリウッドスターのスティーブン・セガール主演の映画をよく観るが、彼は日本で合気道を学んだことがあるらしく、華麗に合気道の技を使う。殺人の手段として。

もともと合気道は護身術であるから、例え身を守るためであっても、それを人殺しの武器として使うのは邪道なのである。映画で彼は合気道の術を用いて人を殺しまくる。いくら映画であっても武道の精神とは相反している。「武」という文字は、戈(ほこ 槍に似た戦いのための武器)を止める(あるいは止めさせる)という二つの字から成っている。武道の精神はここに尽きる。

映画は武道の精神を悪用し金儲けのために使っている。カンフーの上手ジェット・リーを含め、現実生活では武道に習熟していたとしても、達人と言ってしまうことにためられる所以である。

## 儒教徳目の復活

日本は伝統的に孔子の論語ないし儒教精神に慣れ親しんでおり、仁義礼智信忠孝という徳目を道德倫理としてきた。人の道に外れてはならないという理念が全体に行き渡っている。

しかしながら、明治維新と共に欧米流の民主主義が行きわたり、かつての儒教道德は弊履のごとく捨て去られてしまった。犯罪も殺人が多くなり、昭和の半ばま

では尊属(父母と同列以上にある、目上の血族)殺人は第一級殺人として死刑は免れないとされていたが、現在では最も多いのがこの尊属ないし親子の殺人である。

しかし、今ではその概念はなく他の殺人と同列に扱われ、例え親を殺しても(両親でない限り)死刑になることはまずない。

肉親殺害が常態化しているというのは、信じられないほどにまで倫理観が麻痺しているという他はない。先に述べた仁義礼智信忠孝という儒教に基づいた倫理徳目の復活が望まれるところである。

忠孝という徳目は封建時代の遺物と考えられるかもしれないが、忠孝は必ずしも主君に対するものとは限らない。親に対してあるいは目上の人に対して、忠孝であることは何ら矛盾でも旧弊でもない。

伝統文化に忠実であろうとする武道は、むしろこれらの儒教倫理を大切に守ろうとするのである。

私は塾を立ち上げるにあたって、この徳目を入門生誓詞の中心に据えた。ただし、忠孝を削って新たに勇という徳目を加えた。私なりの武士道精神の発揚である。

日本武士道は、第二次世界大戦で滅んだが、その精神は生かされなければならない。

古武道を学ぶ私たちがその精神を現代に蘇らせ、民族の魂として子孫に受け渡して行かなければならぬ。

以上が講演内容の要旨である。講演終了後、350ミリのビール缶を真剣で両断しようとしたが失敗した。ご愛嬌である。

2012年12月1日



### 「いけはな」古典とアート

創美流華道家元渡邊華靖先生より案内があったので、去る11月24日「いけはな展」が催されている田無神社へ出かけて行った。

田無駅へはJR中央線武蔵境駅からバスで向かう。駅から数分歩いた場所に田無神社はある。

あたかも七五三のお参りの真っ最中で、着飾った親子連れで賑わっていた。一週間前に『文武両道と武士道』の講演で創美流華道会館へ出かけたばかりであったので、受付の女性が私の顔を覚えてくれていて、主催者側の代表である渡邊宗家のところへ案内してくれた。

主会場は参集殿となっており、所狭しと「いけはな」が展示されている。案内状には、

「目には見へない大切なものに

花を捧げ

花をいける

田無神社参集殿に

古典からアートまで

いけはなを奉納します」

と書かれているとおり、いけかたは様々であるが、観る者を楽しませる創意と驚き、それにいけるご本人の喜びが満ち溢れていて元気づけられる展示内容であった。

境内のあちこちにもさりげなくいけられており、中には踏み石の上に仕掛けられているものもあった。(冒頭の写真は渡邊宗家作品)







## 金ピカ先生との出会い

本殿で展示会の祝詞をいただくというので案内に従う。

社殿の造りは古色然としていて、何百年もの年月を経ていることは一目瞭然である。

共に案内された来客の一人に、帽子を被って派手派手のジャケットを着て真っ赤なネクタイを締めた人物がいて、どこかで見かけた人だなと思ったがすぐに思い出せなかった。後に紹介されて「金ピカ先生」だと分かった。

神主さんによる厳かな祝詞と参集者に対するお祓いは10分ほどで終わり、再び参集殿に招き入れられお茶を馳走になる。金ピカ先生も一緒だ。頂いた名刺に「金

ピカ先生」と大きく書かれていて本名はない。

渡邊宗家の紹介で、私が古武道をやっていることを知って金ピカ先生との間で刀談義が始まる。

「私はチョウギを持っているんですよ」とおっしゃるので一度聞き返した後に、「ああ、あの備前長船の――」と私が言うと、彼はあの人懐っこい笑顔でにっこりと微笑んで頷いた。

申すまでもなく備前長船長義(ながよし)である。鎌倉時代の古刀で、長船の中でも最も名の知れた逸物である。今買い求めようとすれば2000万は下らない超ド級の大作である。

### 国宝級の銘刀を所持

私は国宝級の大作を所持する金ピカ先生の財力に驚いたが、他にも盛光の短刀を所持しているとのことである。「尻(へし)斬り長谷部」を刀剣展で見たというので、私が即座に「信長の――」と言うと、「そうです。初め信長が持っていて秀吉に渡し、さらに黒田家に伝わって現代まで残っています」

と、ますます相好を崩して身を乗り出してくる。

私が当意即妙に答えるので、うれしくてしょうがないといった感じなのである。他にも何振りも銘刀を所持しているふうであった。

私にどういう刀を持っているかと訊かれたので、試斬に用いる無名の現代刀が私の佩刀です、と答えておいた。あと数振り所持してはいるが、長義の前で名乗るのもおこがましい刀ばかりである。

金ピカ先生は、刀屋以外の人とこういう話が出来て本当に面白かったと言い、ま

たいつかお会いしましょうと挨拶を交わして別れた。

渡邊宗家がどういう経緯で金ピカ先生と懇意になったのかは知らないが、人との出会いはいつも意外性が伴うものである。



2012年12月15日



### 『京ことば源氏物語』海外公演

今回の語りは第二十三帖「初音」。初音とは本文に歌の形で出てくる鶯の初鳴きのことである。

優雅な面持ちでステージに現れた語り部は、「まず本文の解説に入る前に御報告をしておきたいことが・・・」との前置きの後、1月初旬に二週間ほどの予定で、ヨーロッパへ源氏の語り公演に出かけたことを話された。ポーランドのワルシャワとパリがその場所である。

ワルシャワ大学の日本語科の学生相手の公演では、通訳がほとんど必要がないほど学生の日本語が堪能で、しかも、日本ではあまり聞くことが出来なくなった

正しく美しい日本語を彼ら彼女たちがしゃべるので、とても感動したということがその主な内容であった。

詩を書き語ることを長年続けてきた私にとって、聞き流すことのできない報告であった。

女優である山下さんにとって、正しく美しい日本語は常に目標であるはずの事柄である。それを遠い異国の若者たちがしゃべるというのであるから、平穏な気持ちでいられるはずがない。実りのある海外公演であったというべきであろう。



### 雪景色と衣装の色彩

さて、本文の解説である。

彼女は、今回は物語にあまり起伏のない穏やかな帖であるという。源氏が一通りの恋の遍歴を終え、比較的落ち着いた生活を送っているある年(源氏 36 歳)の正月の出来事を叙述している。

とはいえ、平安時代の正月の風景描写が延々と続くというわけではない。源氏と女性は切っても切れない関係にあり、物語の主題もそこに設定されているわけであるから、叙述は女君たちとの交流に意が注がれるのは当然のことである。

作者の式部は雪景色の描写を丹念に行い、雪一色に覆われた雲一つない京の街の鮮やかな風景描写を巧みに演出している。

青空の下での白一色は、六条院に住まう女君たちに配られた桂(うちぎ)の色彩を際立たせるからである。二町(一辺が約 300 メートル)四方を超える六条院の四週に住まう女君四人に配られる桂の配色は絶妙で、それはまさに日本の色そのものである。

西北の町冬の御殿の明石の御方は、梅の折り枝に蝶鳥紋をあしらった白い小桂(うちぎ)と濃い紫の襲(かさね)。

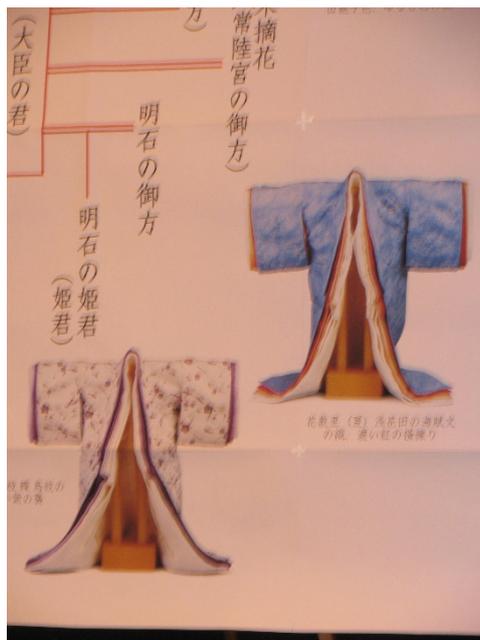
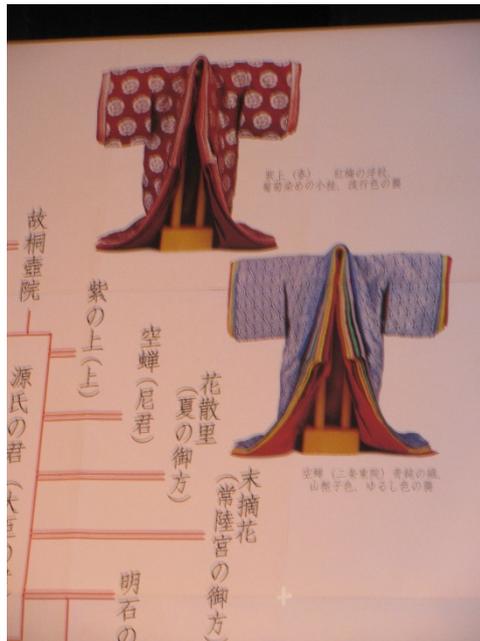
西南の町夏の御殿の離れに住む玉鬘の姫君は、真っ赤な表着に山吹襲(やまぶきかさね)の鮮やかな黄の細長。

同じ夏の御殿の花散里の君は、薄藍色の布地に海辺の風物を図案化した濃い紅の搔鍊り。

東南の町春の御殿の本妻ともいうべき紫の上は、紅梅の浮紋に葡萄染めの小桂。

また二条東院の空蟬の尼君は青鈍色の織の山梔子(くちなし)色の襲。

同じ二条院の末摘花は柳襲の織物の唐草乱れ模様の桂といった具合である。



## 得意絶頂の源氏

配られる織物や袴の図案配色は、贈られた女君たちの立場や性格などを勘案したものである。

女性である紫式部の衣類に対する執着と、源氏の愛人たちに付与された性格や

持ち味を思い起こしながらの衣類の配合は、さぞかし作者式部の想像力を楽しく掻き立てたことであろう。

暮れに贈っておいた衣装を正月に必ず着用するようにとあらかじめ伝えておき、贈られた衣装に身を包んで待ち受ける愛人たちを順番に訪れる源氏の得意絶頂の心情が、読者に匂って伝わってくるようである。

元旦に訪れた女君たちの内で寝所を共にしたのは明石の御方だけである。この女君への描写は念が入っており、後年の立場を暗示するごとくである。

また、鼻が赤く垂れ下がっている末摘花の存在は異色で、たとえ高貴な出であろうとも殿方からは相手にされないと思われる女君でも、一度関わったからには決して捨てることのない源氏的美徳を際立たせる背景として巧みに利用されている。



## 言い訳をする源氏

ふと現実味を帯びてくるシーンに、源氏が明石の御方の御殿へ泊って帰ってきた時の本妻紫の上とのやりとりがある。

すべてを承知の紫の上は腹を立ててそっぽを向いているが、源氏は、

「疲れてうたた寝をしているうちに寝入ってしまい、誰も起こしてくれないのでそのまま朝になってしまった」

などという白けた言い訳をするのだが、むろん紫の上は一日中口をきこうともしない。

ただ、正月の年始客たちとの対応に慌ただしく一日が過ぎ、二人の仲の気まずい空気がうやむやになってしまう、といった件は、今も昔も男女の間の感情の機微は変わらないなあ、とにやりとさせられてしまう。

今回の語りが今年の最後の回となる。翌日の日曜日の今年一年の打ち上げに出席したかったのであるが、翌日は刀道連盟の稽古納めと忘年会が予定されていて、役員の私が出ないわけにはいかず、打ち上げ欠席となったのはまことに残念である。



## ジャズドラムとの一騎打ち

新年の恒例となったコンサートです。今回は我が国ジャズドラム界の大御所ともいうべき中村達也さんを迎えての公演です。達也さんには、実験を交えたドラムソロをお願いしています。

小生は、第一部で刀道流の試斬を行い、第二部で達也さんのドラムソロ、続いて小生の詩即興朗唱とドラムの競演を予定しております。

一部終了時に、お客の皆さんから即興朗唱のテーマをいただき、そのテーマをベースに朗唱を行います。

**出演** 詩即興朗唱 佐土原台介

ドラムス 中村 達也

**場所** 荻窪「かふえほーる with 游」(荻窪駅南口より徒歩 8 分)

03-6661-2336

**日時** 2013 年 1 月 12 日(土曜日) 午後 4 時より

**会費** 3000 円(ワンドリンク付き)

**主催** モリギャラリー(共催 ジパング文化普及会)

2012年12月16日



### 野外「道場」を発見

昨日の土曜日は小雨だったので「塚山道場」へ出向くことは出来なかった。

この名は私が勝手に命名したもので、正式にそう呼ばれているわけではない。杉並区の塚山公園の一角を占める、木立に囲まれた8畳ほどの広さの空間を私がそう呼んでいるだけである。

5年ほど前に私は高井戸に引っ越してきて、野外で木刀を振る場所を探したところ、数日も経たない頃、自転車で3分ばかりのところにある塚山公園を発見し、「その場所」を見つけたのであった。

時あたかも春であり、草木は生き生きと萌え上がろうとしていた。そこは人が通ることのない小高い丘の一隅で木立に囲まれており、人が一人木刀を振っていたところで咎められるような場所ではない。

手前味噌で恐縮であるが、私の剣の練習のために用意された空間に思えたので

ある。勝手に「塚山道場」と名付けた所以である。

### 武蔵野公園の野外道場

剣の仲間たちに訊くと、99, 9%の人が剣の練習が出来るような場所が見つからないと云う。むろん公園はいたる所にあるが、人の目が光っていて木刀や居合刀を振ることなどとても出来ないと云うのだ。

そういう意味では私はとても恵まれていたとしか言いようがない。杉並区に引越す前は小金井市に住んでいたのだが、歩いて数分のところに武蔵野公園があり、自由に剣が振るえる場所を見つけた。梅の古木が散在する格好の場所であった。

10年間仕事が休みの度ごとにそこで稽古をしていたが、ただ一度だけ公園の巡回警備員に見咎められただけであった。

陽を受けてキラキラ光る居合刀を遣っていたので、彼は近寄ってきたのである。刀が真剣ではなく刃挽きの模造刀と知って彼は引き上げていった。見咎められたのは10年間でその一度だけである。

### おせっかいなオヤジの告げ口

塚山道場で稽古をするようになって二年ほど経った頃、遠くから稽古を見ていた中年の男が近づいてきて、

「それは真剣ですか？」

と問うので、

「公園で真剣を振る訳はないじゃないですか。これは模造刀ですよ、ほれ」  
と言って彼に刃を触らせてみた。

ところが彼は

「例え模造刀でも、公共の場である公園できらきら光るものを振り回すのは危ないんじゃないですか」

と食い下がってくるので、

「それもそうですね」といなしておいて、しばらく手を休めることにした。

男はその場から去って行ったが、初め眺めていた場所からこちらの様子を窺っている。

「おせっかいの暇オヤジめ」と私は反感を抱き、再び居合刀を振り始めたのであるが、それを見た男は、そのすぐ奥にある公園管理事務所に急ぎ足で向かって行った。

程なくして管理人さんがやってきて、

「いま、公園の一隅で模造刀を振っている人間がいるので知らせに来た、という通報がありました。

一応区民からの通報ですので様子を見に来ましたが、私としては問題ないと思います。

出来れば木刀だけにして練習してもらえれば、通報する人もいないと思いますが……」

と管理人さんは理解を示して注意を喚起してくれた。

管理人さんは当初から私がそこで稽古している姿を目撃しているはずである。しかし注意されたことは一度もない。それでも私は居合刀を使用するのは止めて、木刀で稽古することにした。管理人の方の要請を無視することは出来ないからで

ある。

(下の写真は「道場」の中心部から眺めて、東西南北4方向の光景)





### 危険性はほとんどゼロ

ところで、ゴルフの練習を禁止する看板はあるが、ゴルフのクラブを振るのと木剣を振るのとでは根本的な違いがある。ゴルフは、地上すれすれにクラブを振らなければ練習にならない。そのために地上の小石等を飛ばしてしまうということが起こる。確かにそれは危険である。

しかし剣を振る行為は、手からすっ飛ばしてしまわない限りは(あるいはすぐ近くへ人が寄ってこない限りは)危険性はない。増してやそこは人が通る場所ではないので危険性はほとんどゼロである。

管理人の方はそのことが分かっているから「問題ない」といつてくれたのであろう。

「塚山道場」で稽古するようになってかれこれ5年になるが、木剣のみでの稽古に限定したこともあるであろうが、見咎められたり注意されたりしたことはない。剣の神様が私に微笑みかけているごとくである。

私は今年71歳になるが、休みを取れば出来るだけこの「道場」へ来るようにし

ている。現在、居酒屋を営む妻の店のランチを担当しているので、土・日・休日しか稽古に来られない。

その他毎週水曜日の夜に文京区のスポーツセンターで剣術を教えており、日曜日には日野の本部道場で真剣での試斬稽古に出掛けることが多い。

### 「塚山道場」で遣う型

木立に囲まれた野外で木剣を振る気持ちの良さは例えようもないほどである。

日常生活にまつわる一切のことを忘れ去ってしまう忘我の一時間なのである。

ここで剣術の新しい形を考案しそれをなぞり、素振りを繰り返す。メニューはほとんど決まっている。

まず、自らが考案した木刀体操を5分ほど行って身体をほぐした後素振りを行う。

真直斬り左右20回ずつ、袈裟斬り左右60回、袈裟斬り上げの連続技左右20回ずつ、水平20回行う。その段階ですでにハーハー息を突いている。

私は現在知人に頂いた黒檀の木刀を愛用しており(写真)、その重さは600gを優に超える。普通の檜の木刀は400gほどであるから、相当に重いことは確かだ。



次いで、我が文武両道塾の制定刀法に定めた抜き打ちの型 5 本を繰り返し遣い、最後に四方を囲む敵を想定した刀法を様々な場面を思い描きながら反復してみる。

夏の終わりに、ハエを少し大きくしたような虫が林の中を飛び交うようになるが、その虫は時折ホバリングして空中に静止することがある。それを狙って水平抜き打ちで斬り棄てるようなこともする。木刀は鞘付なので、抜き打ちの稽古は十分に出来るのである。

そうして、一時間を目標に木刀を鞘に納め刀礼をして刀ケースに収納、自転車を押して「道場」の外に出、我が聖域に一礼して去るのである。

時間はだいたい午後 2 時頃から。夏場は、稽古を終えると道着代わりの作務衣が汗まみれになっており、帰宅してすぐ風呂場で水を浴びる。この瞬間の快感と稽古を終えた満足感は何れもないものであり、ややもすると逡巡しがちな心を次の稽古に押しやるのである。

<< 作成日時 : 2012/12/31 20:46 >>

2012年12月31日



### 無気力な現代の学生

今日は大晦日である。一年間私は何をしてきたのだろうか、という感慨が浮かぶ。時間は連続していて途切れることがなく、一年間を区切る意味は単なる日本人の習慣に過ぎないとは思うものの、大晦日は否応なく総括を迫ってくる。

しかし正直なところ、身近にこれといった変化はない。自身が重病を患ったとか親族に不幸があったということもない。むろん社会は変わり続ける。山中教授のノーベル賞受賞や自民党の政権奪回といったことは年賀状に記したので、これ以上の糊塗はしない。

今から50年前の私たちが学生の頃は、自らの意識を変えるか(ランボー)社会を変えるか(マルクス)を迫られた。どちらかを返答すればその明確な答えを求められたのである。答えることが出来なければノンポリか能無しと烙印を押され、まともな議論の席に加えてもらえない。

私たちは尖鋭な学生の仲間に加えてもらうために、ランボー詩集を読み『資本論』をひもといた。現代の学生にそうした切羽詰まった自己意識があるのだろうか。たとえば、尖閣諸島に中国漁船が突っ込み、我が国の巡視船に衝突してまで島に上陸し、拳銃船長は逮捕され拘留されたが、供述書を作成することもなく翌日に釈放され、帰国した船長が中国本土に英雄として迎えられた国辱に対して、学生たちが民主党政権に抗議のデモをしたであろうか。全くなかった！

### 留学生の実態

現代の学生には切羽詰まった自己意識がほとんどないといって良いであろう。

そのことで思い出されるのは、今の学生たちがアメリカへ留学する数が激減しているということである。その代り、中国や韓国の学生の留学が大幅に増えているという。アメリカは、誰がどう言おうとも科学技術大国である。アメリカで学ぶことによって、物理学化学医療の分野で日本では学ぶことが出来ない多くのことを学ぶことが可能である。

我が国の科学部門のノーベル賞受賞者は、ほぼ100%アメリカ留学経験者である。それなのに何故アメリカに留学しないかという問題に対して、NHKが番組で紹介したところによると、帰国した後に就職先が見つからないという回答が大多数であった。

これは考えさせられる問題である。私はそうした回答を聴いて少なからず衝撃を受けた。アメリカに渡って勉学するからには野望がなければならない。たとえ当初は望み通りの就職先が見つからなくても、世界が驚くような研究を成し遂げたい、と考えて眼をぎらつかせているはずだ、と私は思っていた。

しかし若者たちは「当座の」職を求めているのである。同級生が大学卒業と同時

に望む大会社に就職しているのに、留学していた自分が、帰国して就職できないという状況は我慢がならないというわけである。

では何のために留学するのか。語学を身に着け最新の学問を習得し、新時代の旗手として働くことではなかったのであろうか。

どうもあながちそうではないらしい。海を渡って白人女性男性と交際し、少しばかりの語学を身に着け、観光旅行して周る、というのが大多数の留学生の実態である。むろんその中には山中教授のような人もいて、自らの学問的理想を追求している学生が少なからずいることは間違いないが、留学すれば就職先がないという認識は、どこかで目的意識が狂っているとしか言いようがない。

## 若者たちへの期待

私は日本人にたいして限りない期待を抱いている。

国民の勤勉性と誠実さは世界有数のものであり、その自覚の持続性があれば、常に世界のトップクラスに立つことのできる国家であると思っている。現在日本があまりにも裕福であるから、国民に気鋭の意欲がないと言う人があるとすれば、それは誤りである。

日本人は漫然とした状態にあるときは腑抜け状態であるが、何か大きなテーマが生じたときは、一つに纏まって巨大なパワーを生み出す国民性を有している。最近では今回の大震災がその確かな例である。

学生たちは眠っているように見えるが、ただ息を休ませているだけであると私は思いたい。

今年の感慨で、もう少し個人的なことを回顧する予定でいたが、少し違ったものになったようだ。